

世末翁文集

坤





芝村文集序

- 一 車窓集序
- 一 五車及古序
- 一 小安歌仙序
- 一 大祇句選序
- 一 隱口塚序
- 一 荳蔴句選序
- 一 鬼貫句選序
- 一 真琴序
- 一 七つと介序
- 一 極楽序



一 其雪影序  
一 不冬心序

一 縦歌正名序

其礼文集序

洛 竹巢月居 賦

湖東良猶魚忍雪 輯

洛 醉菴 其成

春泥集序

柳菴翁父の遺稿を編集して余に  
序を乞はるゝに曰余り嘗て春泥集  
石波子洛西の別業を乞はるゝに  
いふ余りは仙侶を問ふ名曰仙侶ハ俗語







たるも草を採りて書を清くむ況詩  
 と御法と何のまを——とすは事ある  
 や或則惜す或曰又尚——とすは御法  
 の教ある名に門戸をふ風酒をさす  
 いつれの門にち——とすは其出上ノ奥を  
 かりんや答曰御法ふ門戸なり——とす  
 御法門とすは——とすは又御法  
 多ふ不分明戸に戸——とすは其申御  
 法にかゝる——とすは其申御

と一巻申す懸く自其能物を撰ぶ  
 申す及て出れ所自その物申いんと  
 顧る乃亦他の法なり——とすはとす  
 みるをな御法を——とすはとす  
 らはま——とすは御法を——とすは  
 其の及とすはとすは御法を——とすは  
 とすは御法を——とすは御法を  
 鬼貫ふはとすは御法を——とすは  
 はくは市城名利乃域を教ま林園



子持心ふあまけし酒を破つて  
 笑し句を得るにや不用三意を  
 ふかしのこゝろよふかしの目も或日又四老  
 子急す幽夢控懐けし老のさし  
 眼を穿て苦吟し句をゆく眼を穿  
 く勿心四老乃所在を失すさうさう  
 老のふれ出化して去るや快く  
 一人月をむねのる香花の初月光  
 ぬれ海は是より純化の御ちるは微

笑す流しよ我社裏少海し句を吐  
 ちて數千景を林支老を非斥す  
 余曰夢あまをさ其詞好しとくとも  
 こそふ人情世態を考へこれいさなま  
 乃むはふ儂ふもさあふのてめな  
 子阿しん待あふ李杜を事ふる縁流  
 類え白く抜たるうさくは回轉  
 をあはもましく聖狐様ありさく  
 馬あまも法を函魔とすさあまに則











めいごさんとして、  
中々、  
よるも作者のまことあるもの遺稿  
ゆへに還りて生かしの聲を減らす  
さういふかゝる大魚のうらやまの  
維陽の一人をよめること  
なることされしうの佳句あり  
おの晴るるたまに  
んやとさき程を  
つら

るよ、  
うふ、  
後、  
て、  
みて、  
て、  
そ、  
そ、











其集あつてまゝに  
去来にねのつゝ句  
紫のまゝもあつて  
あつたあつてあつ  
又あつたあつたあ  
漢あつたあつたあ  
あつたあつたあ  
あつたあつたあ  
あつたあつたあ

鬼はらるる葉と  
好土のくく世と  
板もく文字を自名也

平安女二十歌仙序

蕉公羽去来一紙  
某ヨリ菊唇二傳  
松下随古二議  
ナリ向某ハ去来







ぬきつるあふれと甘らぬる月あつらひ  
伴も依りよ此風變りたよふらあひ  
波もも撫さよあふれたのあつらひ  
たやよ畫しよあふれたのあつらひ  
よたふらよあふれたのあつらひ  
たよよあふれたのあつらひ  
たよよあふれたのあつらひ  
たよよあふれたのあつらひ  
たよよあふれたのあつらひ  
たよよあふれたのあつらひ  
たよよあふれたのあつらひ

乃よいづく摺仙あつらぬかよおす  
あつらぬかよあつらぬかよあつらぬか  
あつらぬかよあつらぬかよあつらぬか  
あつらぬかよあつらぬかよあつらぬか  
あつらぬかよあつらぬかよあつらぬか

宴樂序

あつらぬかよあつらぬかよあつらぬか  
あつらぬかよあつらぬかよあつらぬか  
あつらぬかよあつらぬかよあつらぬか  
あつらぬかよあつらぬかよあつらぬか  
あつらぬかよあつらぬかよあつらぬか



まよひおちてあり一日午よるもねらふよ  
いづれいづれ蟹食さるをのしむ代書  
思ひらむ便したる腹中又雅の貯  
ふきあはを後よ歌をかち依教を  
らよて待眼よ換へるをよお一月よ  
嘯くき化心の歡み譲るをいんや  
月の句を吐くるをいん櫓の腹

方紙句選跋

を紙る而も言すらくよらふよ  
清とさるるをたらの果とさるるを  
依此のよらふよみふれ魚をよらふよ  
そららるるをいんや三斛をよら  
く勢ありて鉄杵を鍼よ磨く一匙  
痛の石をよらふよいんや  
幸なるもいんやいんや  
たらしめいんやいんや  
いんやいんやいんや











ともかゝるものなほありはあはれ  
 荒波一とてよきをうへて白まゆ依  
 のもちやかきしりぬの匂はよ麗玉  
 るふよ時れなき一時た代一物書と  
 一とあはれおるるもみさるるうら  
 るるる一とてかきしりぬの匂はよ麗玉  
 一とあはれおるるもみさるるうら  
 一とあはれおるるもみさるるうら  
 一とあはれおるるもみさるるうら

ともかゝるものなほありはあはれ  
 荒波一とてよきをうへて白まゆ依  
 のもちやかきしりぬの匂はよ麗玉  
 るふよ時れなき一時た代一物書と  
 一とあはれおるるもみさるるうら  
 るるる一とてかきしりぬの匂はよ麗玉  
 一とあはれおるるもみさるるうら  
 一とあはれおるるもみさるるうら  
 一とあはれおるるもみさるるうら







そまおし新のふいふかのあま

瓶草子序

しほのちこみりみらんし西成のあまの  
の心をま新のふいふかのあまの  
のちのあまのふいふかのあまの  
ふいふかのあまのふいふかのあまの  
あまのふいふかのあまのふいふかのあまの  
あまのふいふかのあまのふいふかのあまの

佛僧の話をきかちこもやに費らふ流しり  
みて実の流りなりたたり一圓  
郭の流しり人をあまのふいふかのあまの  
先のあまのふいふかのあまのふいふかのあまの  
あまのふいふかのあまのふいふかのあまの  
あまのふいふかのあまのふいふかのあまの  
あまのふいふかのあまのふいふかのあまの  
あまのふいふかのあまのふいふかのあまの  
あまのふいふかのあまのふいふかのあまの















は所謂拍尾をとり船の舞を  
たつ地をさるるを門下の二三子才之才  
四とほも申へまゝにやうこそなる  
みみらぬいよりの様か後二附  
しう刺りたるを海と云ふしう  
我跡懐の罷を海にたらしめ

能く名なる

能く名なる

あつりしうその法もく  
まじりしうもく法もく  
臨しう法もく又法もく  
よ跡をたつるく軽きあつりし  
の法急向行乃浮法を相顧て或  
おつりしうもく法もく  
ふまのまもくもく  
あつりしうもく法もく  
ふりしうもく法もく







